



同志社京田辺会堂光館ラウンジ展示第9期展
「同志社大学のキリスト教—同志社に蒔かれた種—」



〔開催概要〕

同志社京田辺会堂光館ラウンジ展示第9期展

「同志社大学のキリスト教—同志社に蒔かれた種—」

会期：2019年3月18日～9月中旬

会場：同志社京田辺会堂光館ラウンジ（同志社大学京田辺キャンパス）

主催：同志社大学キリスト教文化センター

協力：同志社大学同志社社史資料センター

表紙資料：「ラットランド演説」1965年ごろ

ごあいさつ

2015年3月の献堂以来、同志社京田辺会堂光館（HIKARI-KAN）で1 Semesterごとに行ってきた一連の展示は、一般的な学部学生の在学期間である4年（8 Semester）を1タームとした企画で、前回の第8期で最初の一区切りを迎えました。2ターム目となる第9期は、第1期のテーマであった「同志社大学のキリスト教」に「同志社に蒔かれた種」と副題を付け加えて、今日につながる同志社大学のキリスト教主義の起源に再び焦点を当てます。

当会堂が着工した2014年は創立者新島襄の渡航150周年に当たっていました。1864（元治元）年夏、21歳の新島七五三太は函館から商船ベルリン号に乗り込んで密出国し、途中ワイルド・ローヴァー号に乗り換え、約1年をかけて同号の母港ボストンにたどり着きました。脱国してから10年後の1874（明治7）年、アメリカで教育を受けた新島は襄の名をもって再び日本の地を踏みます。変わったのは、名前だけではありませんでした。ベルリン号に乗り込んだとき新島はサムライでしたが、帰国したときはキリスト教徒、それどころかキリスト教を宣教する牧師になっていました。

新島は同志社の創立者ですから、一般には教育者として知られています。しかし、それ以前に牧師であり宣教師であったのです。彼はボストンを中心とするマサチューセッツで教育を受けましたが、当地はキリスト教の一教派である会衆派の世界でした。彼が通った学校は会衆派の学校でしたし、周りの人々もほとんどが会衆派の信者、とりわけ新島の親代わりとなったハーディーは会衆派の教会関係の実力者でした。

新島はマサチューセッツで充実した教育を受けるにしたがって、日本で学校を建てることを希求するようになりました。ただ、彼が思い描いたのは単なる学校ではなく、あくまでもキリスト教が土台となった学校でした。会衆派の世界が新島にとって理想の場所であり、キリスト教は彼にとって飾りなどではなく、真理を知り、社会の中で自由に考え、生き生きと生きるために不可欠の生の基盤でした。彼は教育者である前に、聖書を読み、祈り、説教を大切にする一人のクリスチャンだったのです。

以上のような事情から、光館での一連の展示の最初のテーマが「同志社大学のキリスト教」となったのでした。新島が実際に使用していた英語聖書のレプリカも展示されています。聖書への書き込みからは、彼が行った聖書の言葉との対話を垣間見ることができます。この展示が、同志社がキリスト教によってどのように支えられ導かれてきたかを再認識する機会となれば幸いです。

同志社大学キリスト教文化センター所長

横井 和彦

2019年3月

目次

ごあいさつ	1
展示テーマ「新島襄とキリスト教」	3
展示テーマ「同志社とキリスト教」	13
資料リスト・使用写真リスト	23

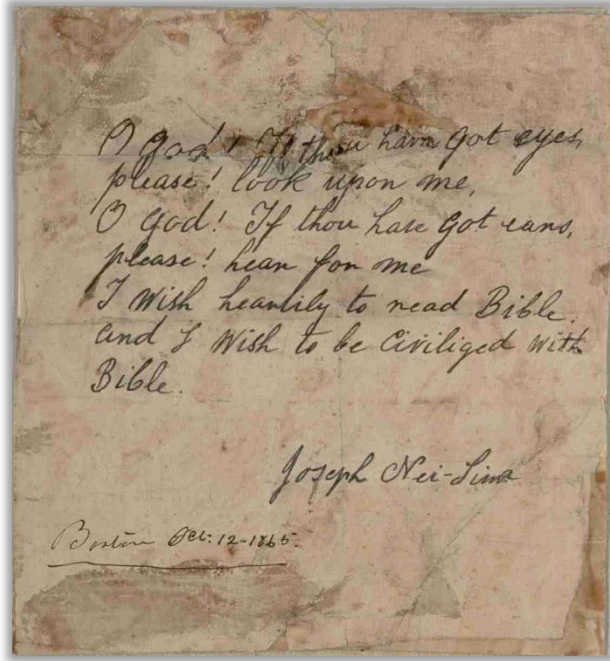
【凡例】

- 一、本パンフレットは、同志社京田辺会堂光館ラウンジを会場として、2019年3月18日から9月中旬まで開催する同志社京田辺会堂光館ラウンジ展示第9期「同志社大学のキリスト教—同志社に蔭かれた種—」（主催／同志社大学キリスト教文化センター、協力／同志社大学同志社社史資料センター）の解説付き簡易冊子である。
- 一、展示資料解説においては、冒頭に資料名、年代などの基本情報を可能な限りこの順に記した。なお、複製資料にはその旨を明記し、また、年代については特定可能な範囲で記し、書簡及び日付の記載が重要と認められる資料について適宜月日を記載した。
- 一、ポスターパネル資料写真においては、本文中には写真名のみを記した。
- 一、全ての資料及び写真に関して、現在判明している情報は「資料リスト」及び「使用写真リスト」に記載した。
- 一、年月日表記は、新島襄の慣例に習い、新島が太陽暦を用い始めた1865年（慶応元）1月30日以降は太陽暦を用いる。この日以前は、太陰暦を用いる。
- 一、新島襄の名前の標記については、便宜上、誕生から密出国後アメリカに到着し、フィリップス・アカデミーに入学するまで（1843年2月12日～1865年10月30日）は新島七五三太（ただし、諱を使用しているときは新島敬幹）、それ以降は新島襄とした。英文で書かれた場合でも、表記は日本語で統一した。
- 一、展示資料の解説は、同志社社史資料センターが担当した。
- 一、パンフレットの編集は、同志社大学キリスト教文化センター及び同志社社史資料センターが担当した。

展示テーマ

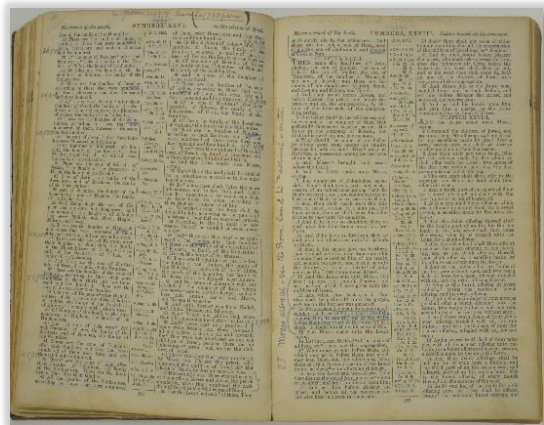
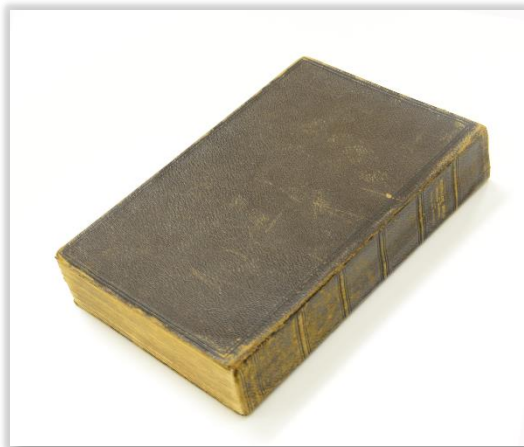
「新島襄とキリスト教」

新島襄はキリスト教と出会い、学び、信仰を深めます。やがて志を同じくする人々とともに日本で伝道に努め、キリスト教主義の教育を実践していきます。その軌跡は同志社が所蔵する数多くの資料からもうかがうことができます。ここではその資料の一部を紹介します。



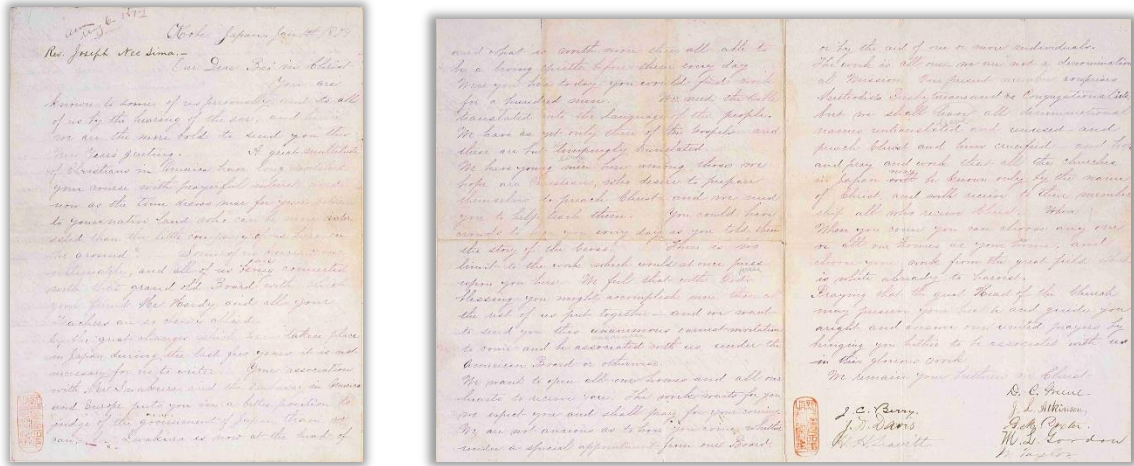
祈祷文 (複製) 1865年 1枚 13.5×12.5cm

1865(慶応元)年10月12日、新島がボストン入港後に英文で認めた祈祷文です。ボストンに到着した新島は、乗船してきたワイルド・ローヴァー号船主である、A.ハーディー (Alpheus Hardy, 1815~1887)より脱国の理由を書くように言われ、執筆のために3日間船員ホームで過ごします。その間にこの祈祷文を書きました。



新島襄旧蔵聖書 (複製) 年不詳 1冊 21×14cm

新島が愛用したと伝わる聖書です。アメリカに到着した翌年1866(慶応2)年に、ハーディーが後見人を務めていたJ.M.シアーズ (Joshua Montgomery Sears, 1854~1905)より贈られました。聖書の中にある手書きのメモや印は、新島のキリスト教に対する知的好奇心や信仰の深化過程を示しています。



新島襄宛在日宣教師団 8 名連名書簡 (複製) 1874 年 1 月 1 日付 1 通 25.1×20.1cm

神戸で伝道に携わっていた宣教師 8 名が新島に宛てた手紙です。彼らはアンドーヴァー神学校卒業を目前に控える新島に対して、日本伝道に加わってほしいと招請しています。日本人宣教師としての新島への期待の表れです。その後、1874 年 11 月、新島はアメリカン・ボードの準宣教師として日本に派遣され、日本ミSSIONの宣教師たちの働きに加わります。



自責の杖 (複製) 明治時代 3 片 最大 60cm

打掌で折れた新島の杖です。1880(明治 13)年 4 月、2 年生の上級組と下級組の合併決議を発端とする学内スライキが発生し、学内が混乱しました。新島は同月 13 日の朝礼の席で、一連の騒動は校長である自分の責任である、として自らの掌を杖で打ちつけました。この衝撃的な事件を物語る杖は、新島のキリスト教信仰にかかる贖罪感、そして教育観を伝える象徴として、これまで受け継がれてきました。

Nacima & Yamamoto, Nakamura & Kojima, Japan
 having made a corporation shall employ J. D. Davis, citizen
 of the United States of America, at their own expense
 & the agreement bet^{ween} them shall be as follows.

1. Davis shall be employed as a teacher of all branches
 of the English language for the term of seven years that is, from
 May 1st 1884 to May 1st 1891 or 1892, or till May 1st of the
 9th month 1892 or 1893.
2. During the employment, his house shall be furnished
 free of rent. Next he will be allowed to have expenses
 for his family, furniture, conveyance, stable, &c.
3. His wages shall be 1000 Yen per month & will be paid
 at the end of each month.
4. The power for making all regulations & deciding what to
 teach & giving the books of instruction, &c, shall be reserved
 to the board of directors.
5. What time he shall devote to his duties shall be decided by the corp^{or}.
6. During his employment, he shall not engage in any
 mercantile business.
7. If he does not attend his duty, by his own default, during
 the regular teaching days, given by the corporation, his wages
 for that day shall be deducted from his monthly wages.
 If the board desires to employ him beyond the engaged
 term, it shall be notified to him beforehand.

9. If the corporation ^{desires} to employ him for any reason
 other than the expiration shall pay him his wages
 for the four preceding months, all of the months
 to be received from the agreement, his wages will
 cease to be paid from the following day.

10. If he has not over one month, he will be obliged
 to substitute another day by ^{mutual} consent of
 the corporation & if he does not decide over three months, the corporation
 returned him & the corporation shall be paid with his wages
 will cease to be paid from the following day.

for Nacima
 Yamamoto, Nakamura, &
 Kojima Japan.
 J. D. Davis,
 The United States of America.

May 1884
 J. D. Davis

J. D. デイヴィス雇用契約書下書き (複製) 明治時代 1枚 25.5×20.3cm

同志社英学校開校時の2名の教員のうちのひとりが宣教師J.D.デイヴィス(Jerome Dean Davis, 1838~1910)でした。これはデイヴィスと同志社の雇用契約書の草稿です。神戸で伝道に尽力していたデイヴィスは、新島の同志社設立の志に賛同し、その設立に加わりました。神戸でデイヴィスが教えていた学生の何名かは、同志社英学校開校後最初の学生となります。デイヴィスは、同志社英学校開校における最大の貢献者のひとりです。

Nacima for, Yamamoto, Nakamura and
 Kojima, Japan, of Kyoto, Japan, the
 masters of the Doshisha English school
 do hereby desire to continue to employ
 Prof. D. W. Learned, a citizen of the United
 States of America, at their own expense
 and the agreement between them shall
 be as follows.

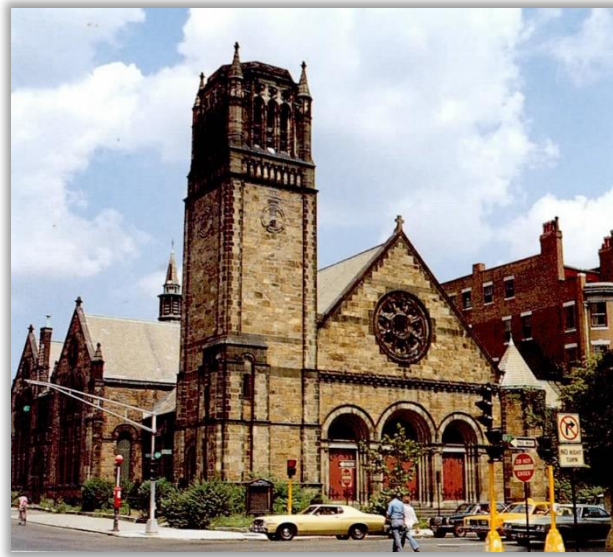
1. Prof. D. W. Learned shall be employed
 as a teacher of English studies for the term
 of five years that is, from May 1st
 year 3rd month 15th day or March 15th
 1884 till May 22nd year 3rd month 14th
 day or March 14th 1889.
2. His wages shall be 1000 gold yen
 per month.
3. During his employment he shall
 not engage in any mercantile business.
4. If the corporation desires to employ
 him beyond the engaged term it
 shall notify him beforehand.

Nacima for,
 Yamamoto, Nakamura,
 Kojima, Japan.
 D. W. Learned,
 New London,
 United States of
 America.

D. W. ラーネッド条約書 (複製) 1884年 1枚 21×33.5cm

同志社英学校開校後、デイヴィスに続いて招聘された人物のひとりが、宣教師 D.W.ラーネッド(Dwight Whitney Learned, 1848~1943)でした。当時の宣教師は様々な知識に通じており、ラーネッドもその例外ではありません。草創期の同志社でラーネッドが担当した講義は多岐に渡り、キリスト教に関する講義をはじめ、語学や経済学、天文学等にまで及びました。大学令による大学開校に際しては大学長に就任し、半世紀にわたり同志社の発展に大きく寄与しました。

<マウント・バーノン教会>



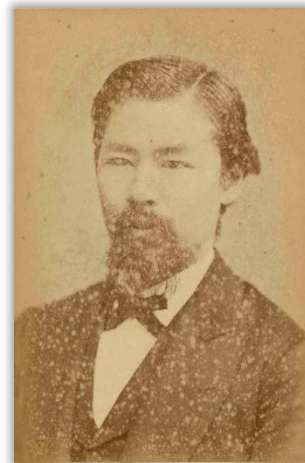
現在のマウント・バーノン教会

1874 (明治7) 年9月24日、新島はボストンにあるマウント・バーノン教会にて按手礼 (聖職者の任命式) を受け、正式に牧師となりました。この時、アーモスト大学教授の恩師 J.H.シーリー (Julius Hawley Seelye, 1824~1895) が「ヨハネによる福音書」第12章32節に拠って記念講演を担当しました。ピューリタンの伝統を堅持していたアーモスト大学における3年間の教育的感化が新島にもたらしたものは多く、特に学問的にも人格的にも大きな影響を与えた人物がシーリーでした。

<アンドーヴァー神学校時代の新島襄>



アンドーヴァー神学校時代の新島襄、学友、スタッフの集合写真



新島襄 (アンドーヴァー神学校在学时)

新島はアーモスト大学卒業後、ハーディーとも相談の上、アンドーヴァー神学校で学ぶことを決意し、1870 (明治3) 年9月特別コースに入学しました。神学校では、ニュー・イングランド神学を中心に、牧師・宣教師にふさわしい知識と教養を身につけるべく勉学に励みました。また、在学中の1872 (明治5) 年には岩倉使節団から通訳を委嘱されて文部理事官田中不二麿に随行し、田中とともに欧米8カ国の教育施設や病院、新聞社などを見学しました。西洋の教育を間近で見た新島は、欧米における人間教育の価値とキリスト教感化の重要性を実感し、その後の自身の教育観を形成していきました。

<新島襄と八重の肖像>



新島襄と八重

結婚後間もない2人の姿。襄は洋装、八重は着物姿で洋風の帽子を携え、靴を履いています。明治初期の日本において洋装の日本人は非常に珍しく、和服に帽子と合わせた八重の姿を、徳富猪一郎（後の蘇峰）が「鶴」と揶揄したエピソードはよく知られています。2人の挙式はデイヴィス宅で行われました。この結婚式は京都初の日本人クリスチャンの挙式です。

<新島旧邸>



竣工当時の新島邸

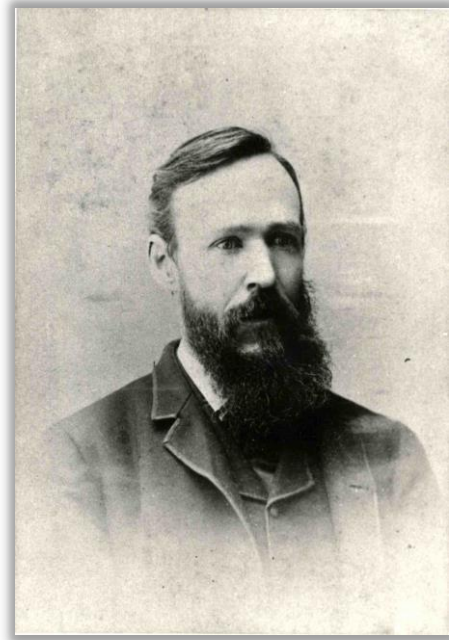
新島夫妻は、装いのみならず生活様式も西洋風でした。2人が生活していた自宅（現在の新島旧邸）はそのひとつの象徴です。

この邸宅はボストン時代にハーディー家で同じ時間を過ごした友人、J.M.シアーズからの寄付で建てられました。また、この場所は、同志社英学校開校時に、仮校舎として借家した高松保実邸があった場所でもあります。旧邸の外観は西洋風ですが間取りは和風で、和洋折衷の木造二階建て住宅です。1985（昭和60）年に、京都市の有形文化財に指定され、以降定期的に一般公開されています。

<デイヴィスとラーネッド>



J. D. デイヴィス



D. W. ラーネッド

J.D. デイヴィスとD.W. ラーネッドは、ともに同志社の発展に生涯の多くを捧げたアメリカン・ボードの宣教師です。デイヴィスは、設立時から同志社の教育と運営の両面に尽力し、ラーネッドも多種多様な講義を受け持ち、日本で最初に経済学の講義を行ったことで知られています。同志社の振興に大きく貢献した二人の名前は、京田辺校地の「デイヴィス記念館」と「ラーネッド記念図書館」に冠されています。

<クラーク神学館>



竣工当時のクラーク神学館

Byron Stone-Clarke Memorial Hall



玄関欄間に刻まれたクラーク神学館の正式名称

新島の永眠後、彼を記念する神学館を建築しようと、校友による募金活動が行われました。しかし、なかなか結果が伴いません。そのような折に、アメリカン・ボードを通じてB.W. クラーク夫妻から、亡くなった子息B.S. クラークの名を館名に冠するという条件で、10,000ドルの寄付を受けました。その寄付を元手に、1893年（明治26）、尖塔が特徴的な煉瓦の建物が竣工しました。竣工当時は神学教育の中心でしたが、1963年（昭和38）の現在の神学館完成後、クラーク記念館と改名されました。

＜同志社教育のバックボーンとなるキリスト教主義＞

キリスト教に基づいた「良心」に従って生き、
その「良心」の中で「自由」を行使する



創立者 新島襄

同志社教育のバックボーンとなる キリスト教主義

1864年6月14日、愛国心に燃えて脱国した新島襄は、欧米の知識を得たいという思いに加えて、神の存在を知り、もつと聖書を学びたいという志ももっていました。新島は日本を脱国する前、20歳のころには漢文で書かれた聖書を既に読んでいたのです。

およそ10年に及ぶアメリカでの生活を終え、アメリカン・ボードの宣教師となって日本に戻った新島は、京都に同志社英学校を設立します。新島の理想の教育は、「知徳併行による人物の養成」でした。「信仰」と「學術」を車の両輪のように考えていました。知識に偏らない、徳育も併せもつ教育であり、その徳育の基本がキリスト教でした。

そして、新島は、他者に奉仕し、他者に「与える」精神性（「受けるよりは与えるほうが幸いである」―使徒言行録20章35節）を有する人物を同志社から輩出することを望みました。つまり、利己心ではなく、利他心（良心）をもつ青年です。それを端的に表現したのが、「良心碑」に彫られている「良心之全身ニ充滿シタル丈夫オトコノ起リ来ラシム事ヲ」です。

皆さんが、学生生活を通して同志社大学のキリスト教主義について考え、良心を育み、卒業後、社会のそれぞれの場所でその力を発揮することができるよう願っています。

キリスト教文化センター所長

<同志社の精神的な基底をなすキリスト教主義>



キリスト教主義と教育理念の関係を表す相関図

同志社の支柱である自由主義と国際主義を基底で支えるものは、キリスト教主義です。これは同志社独自の校風を形成する最大の要素となっています。新島は、学生一人ひとりを、神がつくられた「人格」として最大限に尊重しました。以来、「人ひとりは大切なり」が大事な校風として守られてきました。その結果、聖書にあるように、隣人を尊重し、他者に奉仕する「地の塩、世の光」とも言うべき個性豊かな多くの卒業生を、いろいろな分野へ開拓者として送りこんできました。そうした営みは、これからも永続します。

<チャペル・アワー (キリスト教文化センター主催) >



京田辺校地 言館(KOTOBA-KAN)礼拝堂

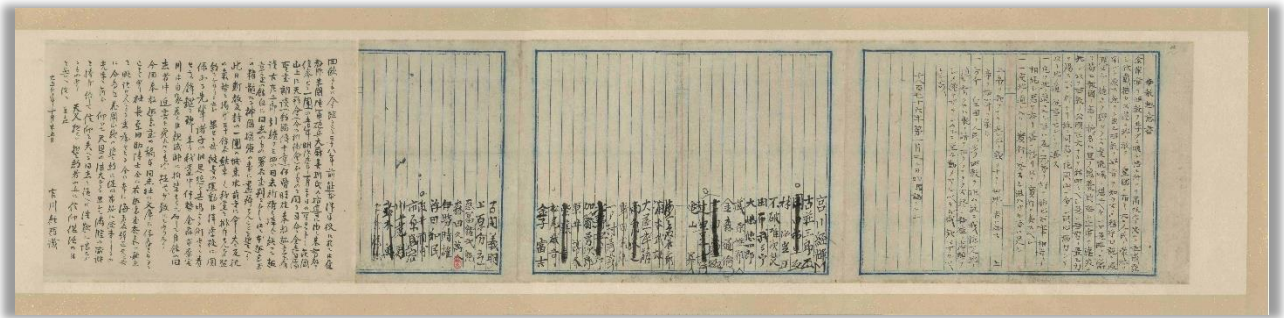
開講期間中、両校地の礼拝堂においてそれぞれ週 3 回行われており、現代に生きる人間の諸問題をめぐって、本学教職員や教会の牧師、そして様々な分野で活躍されている方々に奨励していただいています。チャペル・アワーは礼拝形式であり、オルガンの奏楽で始まり、讃美歌斉唱、聖書朗読、祈祷、奨励者によるメッセージ、祝福などが行われています。クリスチャンでない方々にも親しみが持てるように、日々の暮らしにまつわる話などを交えながら、イエス・キリストや聖書のことばをわかりやすく語っていただけます。また、教職員の場合には、同志社におけるご自身の学びや体験をお話されることもあります。学生の皆さんだけでなく、地域の方々も参加されていますので、ぜひ気軽にお越し下さい。

	今出川校地	京田辺校地
火曜日	17 : 30～18 : 10	ランチタイム (12 : 35～13 : 00)
水曜日	10 : 45～11 : 30	
金曜日	ランチタイム (12 : 35～13 : 00)	

展示テーマ

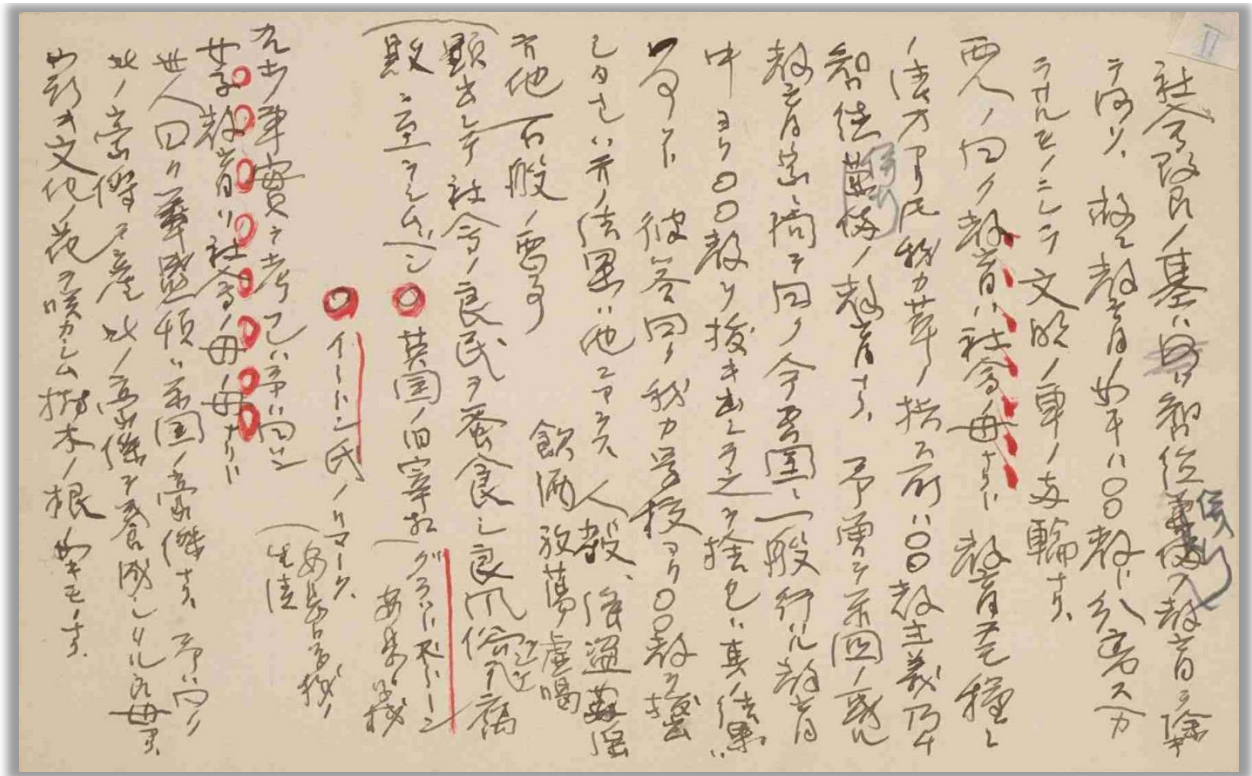
「同志社とキリスト教」

同志社には創設期に関連する資料が数多く所蔵されています。その中には、新島襄が考えていたキリスト教と教育の関係、キリスト教と社会の関係、あるいは、キリスト教主義によって養成される人物像を示す資料も多数含まれます。その中から一部の資料を紹介します。



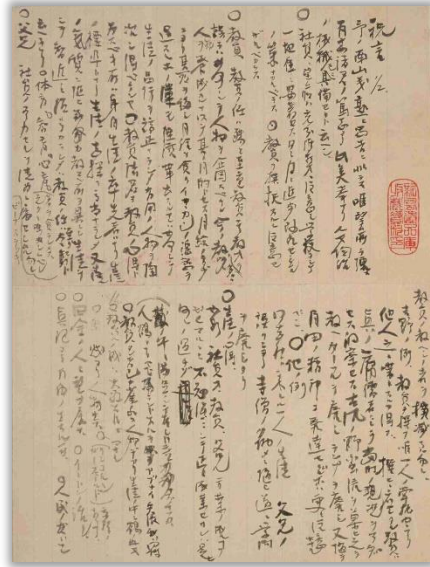
奉教趣意書 (複製) 1876年1月30日 1巻 21.5×73cm

同志社の最初期に入学した「熊本バンド」の学生の多くが署名した文書です。熊本洋学校教師のL.L.ジェーンズ(Leroy Lansing Janes 1838～1909)の影響を受けた35名の学生たちは、1876(明治9)年1月30日に熊本の花岡山で、キリスト教を信じる者として日本伝道にともに従事することを盟約し、この文書に署名しました。1876年に洋学校が閉校すると、漸次彼らは同志社に入学してきました。



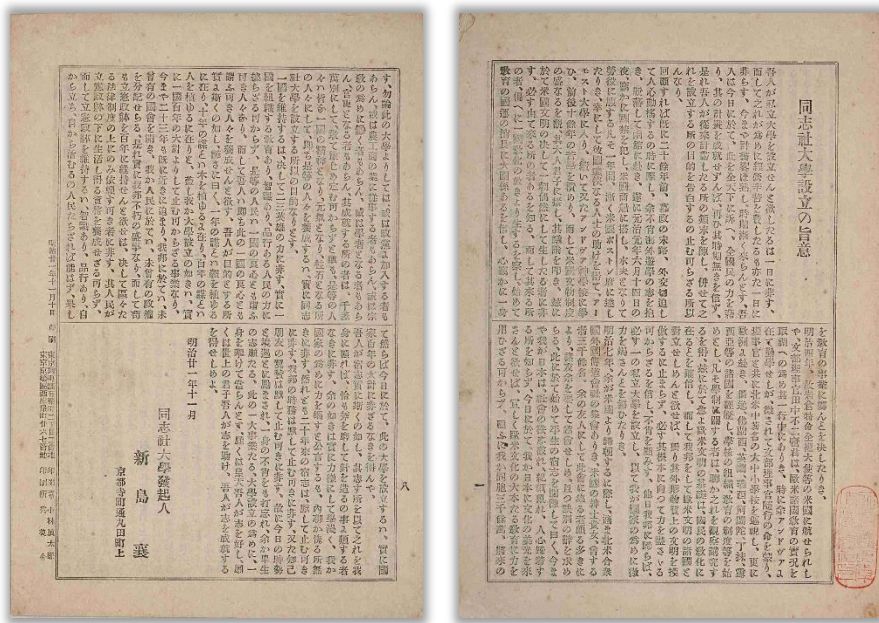
草稿「梅花女学校ニ於ケル女子教育」(複製、部分) 明治時代 4枚 12.5×20cm

梅花女学校は、1878(明治11)年大阪で府知事が始めて認可したキリスト教主義の女学校です。新島はこの女学校で演説し、明治の初頭における女子教育とキリスト教の関係を次のような文言で表現しています。「社会改良ノ基ハ智徳併行ノ教育ヲ除キテ何ノ、故ニ教育ノ如キハ基督教ト分離スヘカラサルモノニシテ、文明ノ事ノ両輪ナリ」。家政中心であった当時の女子教育とは異なる考え方です。



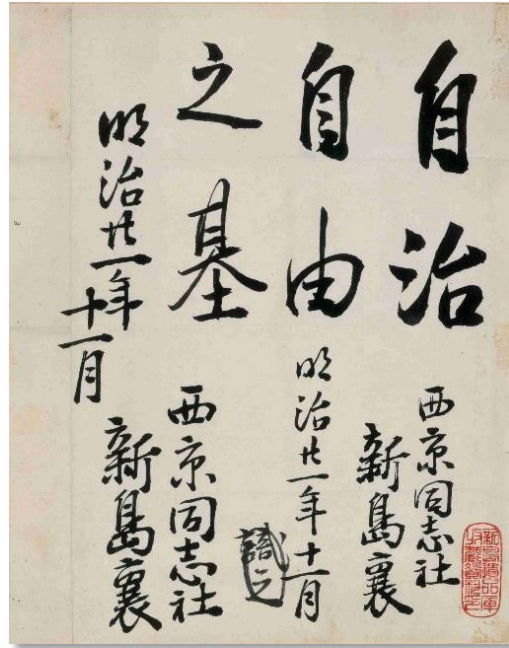
草稿「南山義塾ニ望ム」(複製) 1882年 1枚 19.7×26cm

南山義塾とは小学校課程を修了した農村の子弟を対象とする私塾で、のちに南山城の自由民権運動の拠点となりました。新島は、1882(明治15)年4月30日に行われた開校式に臨み、祝辞を披露しています。その草稿には、教員としてのあるべき姿や、学生の心得が記されており、中には「○体育 ○智育 ○心育」という文字もあります。知育に偏重しない教育の重要性に対する新島の認識は一貫しています。



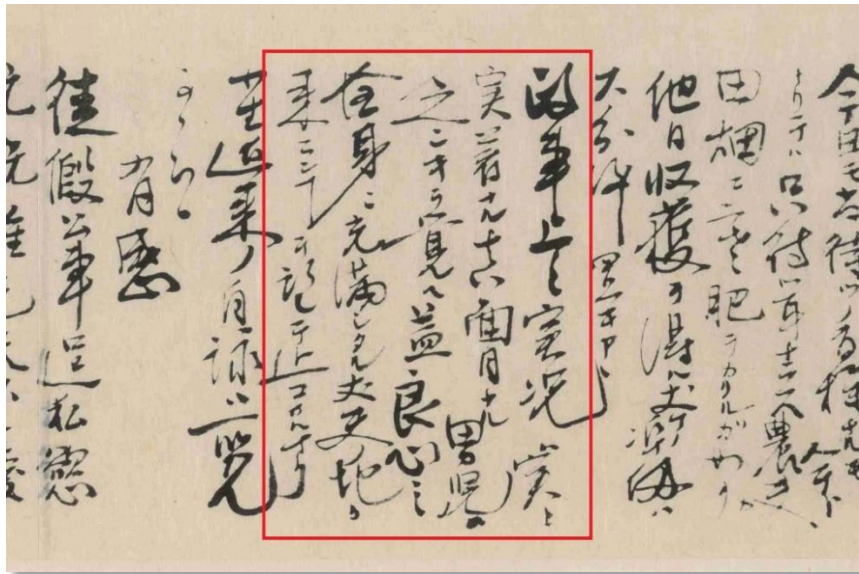
『同志社大学設立の旨意』(複製) 1888年 1枚 21.5×14.8cm

1888(明治21)年11月から配布された、新島の考える大学設立の国家的社会的意義と彼の教育論が反映された文書です。この文書を通じて新島は同志社のキリスト教主義教育が養成する、一国の良心となるべき人物の育成と、国家に対するその人物の有用性を広く世に訴えました。この文書は同年11月上旬から各社の新聞紙上に掲載され、新島の考えがメディアを通じて全国に伝えられました。なお、同志社が史上初めて「大学」を設けるのは、1912(明治45)年です。



三行書「自治自由之基」 (複製) 1888年 1枚 23.5×17cm

新島は、「一国を維持するは、決して二三の英雄の力に非ず。実に一国を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず」(『同志社大学設立の旨意』)という考えのもとに、同志社大学の設立に奔走しました。そして、立憲体制のもと、民主主義国家へと歩み始めようとする日本で、「自治自立の人民」、「一国の良心」となる有用な人間を教育することが、新島の目標であり、同志社の目標でした。その志を文字に具現した墨書です。



〔赤枠内〕
政事上之実況ハ実ニ実着ナル真面目ナル
男児ノ乏シキヲ覺ヘ益良心之全身ニ充滿
シタル丈夫ノ起リ来ランコトヲ望テ止マ
サルナリ

横田安止宛新島襄書簡 (複製、部分) 1889年11月23日付 1通 18×169cm

新島が同志社普通学校 5 年生の横田安止に送った手紙です。この手紙の中には、新島が考える「良心」を表象する一文「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ望テ止マサルナリ」があります。立憲体制下で民主主義を牽引する主体性のある人物の登場を願った文言です。この文言は、「良心碑」となり、京田辺キャンパスをはじめ、日米で合計 9 基が立てられています。

<ラットランド演説>



油彩画「ラットランド演説」



グレイス教会

アメリカのヴァーモント州ラットランドで開催されたアメリカン・ボードの第65回年次総会で、新島が演説した時の様子を描いた想像絵。新島は、海外での学びを終えて、アメリカン・ボードの準宣教師として日本へ派遣される際、挨拶に立ちました。この時はじめて、新島は日本でのキリスト教主義学校設立の志を吐露します。その志に感銘を受けた聴衆から、その場で計約5千ドルの寄附の約束を得ました。この寄附が、後に同志社の開校・運営に活用されたと言われます。

<開校当初の今出川キャンパス>



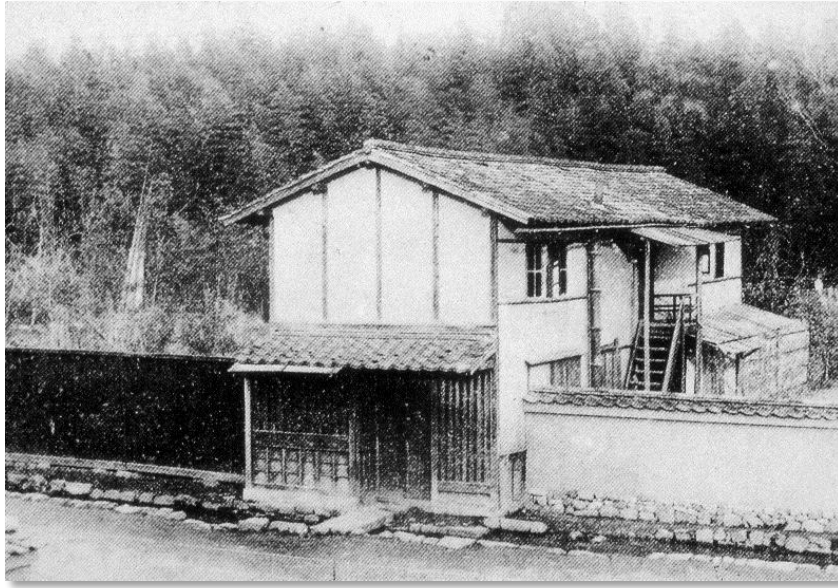
今出川校地最初の専用校舎 第一寮と第二寮



薩摩藩邸跡碑

同志社英学校最初の専用校舎は、木造の教室兼寮2棟と食堂で、在学生の多くは寄宿舍生でした。寺町通（現在の新島旧邸のある場所）の仮校舎から、今出川への移転は、開校翌年の1876（明治9）年9月でした。この土地は、新島襄が1875（明治8）年6月に、山本覚馬の力添えて購入した薩摩藩邸跡です。キリスト教禁教の高札撤去後も、キリスト教に対する反発が残る時代に、内裏（現在の京都御苑）の真北、京都五山第二位の相国寺の門前に校地を構えることになりました。

<三十番教室>



三十番教室



横村正直 (京都府知事時代)

同志社開校に際して、キリスト教主義の学校に対する市民らの反発を恐れた京都府権知事横村正直 (1834~1896) は、学校で聖書を教えないことを開校の条件としました。これに対して新島は、校外での聖書講義を制限しないことを条件に、横村の条件を受け入れます。その後、学校と大門町通を隔てた場所にあった廃屋 (現アーモスト館の旧管理人棟あたりの場所) を新島が入手し、聖書講義の教室としました。この教室が三十番教室です。

<同志社英学校第1期卒業生写真>



同志社英学校第1期卒業生写真



初期の同志社英学校生徒

同志社英学校第1期卒業生は全員が熊本バンドでした。卒業後の彼らは同志社で教師をする者もいれば、伝道のために九州や関東に赴く者もあり、それぞれ活躍の場は異なりましたが、各分野で顕著な働きを残しました。また、卒業式で行われた卒業生の演説会では、宗教のみならず社会の諸問題との関係で設定された、幅広いテーマでの演説が日本語と英語で行われました。同志社では、草創期からキリスト教精神を基本とし、社会に貢献しうる素養と実行力を身に着けた人物の育成が実践されていました。

<同志社礼拝堂>



竣工当時の同志社礼拝堂



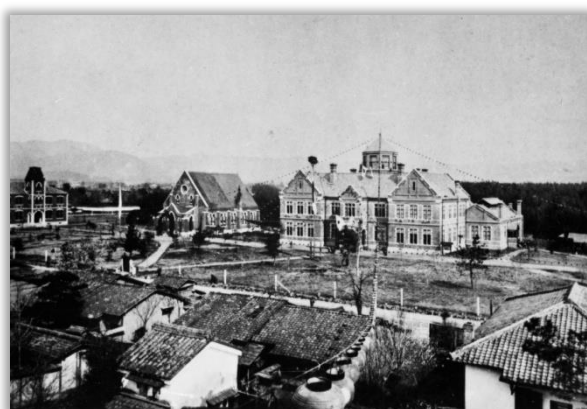
竣工当時の同志社礼拝堂内部

礼拝堂が完成する半年前の1885（明治18）年12月18日、同志社礼拝堂定礎式が挙行されました。この時新島は「此礼拝堂ハ我同志社ノ基礎トナリ又タ精神トナル者」と述べ、礼拝堂が同志社の象徴的存在であることを示しました。更に、「教育ノ基本ハ宗教ニアリ」とも訴え、キリスト教が人格教育の基礎であり、あらゆる教養や信仰の基本であるとも述べています。現在も礼拝堂は宗教教育の中心的な場を担っています。

<明治20年代の今出川キャンパス>



明治中期の今出川キャンパス



ハリス理化学校開校日の今出川キャンパス

明治20年代に入ると、キャンパス内には次々と教室棟や寮が建設され、学校として質的量的に拡大していきます。1887（明治20）年には書籍館（現・有終館）の開館式が挙行され、新島永眠後の1890（明治23）年には、ハリス理化学館が竣工し、理化学教育の拠点が完成します。1893（明治26）年にはクラーク神学館が竣工し、さらにこのころ同志社徽章が正式に定められました。

<オープン・プログラム (キリスト教文化センター主催) >



京田辺校地 手話入門クラス



今出川校地 パイプオルガン講座受講生発表会

1958 (昭和 33) 年 4 月にキリスト教文化センターの前身である宗教部が主催した 4 つの研究会を基にして、「公開講座」がスタートしました。1981 (昭和 56) 年の国際障害者年を機に「手話」と「点訳」の講座を開設。2010 (平成 22) 年度からは名称を「オープン・プログラム」へと変更し、その後も公開講演会の開催や多様な講座の新規開講などにより、一層の発展を遂げています。これまでの受講生は 9,000 人を超え、学生のみならず市民の皆さんも多数参加されています。開講している講座は、キリスト教文化センターのホームページをご覧ください。
<http://www.christian-center.jp/>

<Doshisha Spirit Tour (キリスト教文化センター主催) (熊本キャンプ/安中・会津キャンプ) >



新島襄旧宅 (群馬県・安中市)



熊本洋学校教師ジェーンズ邸 (熊本市)



熊本バンド奉教之碑 (熊本市花岡山)

同志社大学には、建学以来脈々と受け継がれてきたキリスト教主義教育、新島襄の教育理念、そしてその実践といった精神と伝統があります。キリスト教文化センターが主催するDoshisha Spirit Tourは、事前学習と現地でのフィールドワークを通じて建学の精神を体感し、同志社を見つめ、自らを省みようとする試みであり、同志社ゆかりの地である「熊本」と「安中・会津」を隔年で訪れています。

熊本は、のちに日本のキリスト教史において「熊本バンド」と呼ばれ、設立当初の同志社を形作った俊才たちを生み出した土地。安中は言うまでも無く、新島襄の祖父の地(安中藩)であり、会津は同志社草創期に新島の「同志」となった山本寛馬、そして新島の妻・八重を育んだ地です。

<Doshisha Spirit Week (キリスト教文化センター主催) >



同志社大學應援団による演舞



講演会



キャンパスめぐり隊

同志社大学には、建学以来脈々と受け継がれてきたキリスト教主義教育、新島襄の教育理念、そしてその実践といった建学の精神と伝統があります。Doshisha Spirit Week は、キリスト教主義教育や創立者新島襄に触れ、同志社人としてのアイデンティティを高めることを目的として2003年から始まり、毎年春学期（5月末～6月初旬ごろ）と秋学期（10月末～11月初旬ごろ）に1週間開催されています。期間中には、学内外からのゲストスピーカーによる講演会、建学の精神や同志社の歴史に関する資料展示、キャンパス内を中心に見学する「キャンパスめぐり隊」や同志社大學應援団による演舞などさまざまな企画を行っています。

資料リスト (全て複製)

資料名	作者・著編者	年代	法量 (cm)	員数	所蔵先
展示テーマ「新島襄とキリスト教」					
祈禱文	新島襄	1865年10月12日	13.5×12.5	1枚	同志社社史資料センター
新島襄旧蔵聖書	-	年不詳	21×14	1冊	同志社社史資料センター
新島襄宛在日宣教師団8名連名書簡	J. C. Berry	1874年1月1日	25.1×20.1	1通	同志社社史資料センター
自責の杖	-	明治時代	最大60	3片	同志社社史資料センター
J.D.デイヴィス雇用契約書下書き	新島襄	明治時代	25.5×20.3	1枚	同志社社史資料センター
D.W.ラーネッド条約書	新島襄、山本覚馬、 中村栄助	1884年2月	21×33.5	1枚	同志社社史資料センター
展示テーマ「同志社とキリスト教」					
奉教趣意書	-	1876年1月30日	21.5×73	1巻	同志社社史資料センター
草稿「梅花女学校ニ於ケル女子教育」	新島襄	明治時代	12.5×20	4枚	同志社社史資料センター
草稿「南山義塾ニ望ム」	新島襄	1882年4月20日	19.7×26	1枚	同志社社史資料センター
『同志社大学設立の旨意』	徳富蘇峰、新島襄	1888年	21.5×14.8	1冊	同志社社史資料センター
三行書「自治自由之基」	新島襄	1888年11月	23.5×17	1枚	同志社社史資料センター
横田安止宛新島襄書簡	新島襄	1889年11月23日	18×169	1通	同志社社史資料センター

使用写真リスト

ポスターパネルタイトル	写真・画像	年代	所蔵先
展示テーマ「新島襄とキリスト教」			
マウント・バーノン教会	現在のマウント・バーノン教会	1990年代か	同志社社史資料センター
アンドーヴァー神学校時代の 新島襄	アンドーヴァー神学校時代の 新島襄、学友、 スタッフの集合写真 新島襄(アンドーヴァー 神学校在学時)	1870年代	同志社社史資料センター
新島襄と八重の肖像	新島襄と八重	1876年ごろ	同志社社史資料センター
新島旧邸	竣工当時の新島邸	1878年	同志社社史資料センター
デイヴィスとラーネッド	J. D. デイヴィス D. W. ラーネッド	明治時代	同志社社史資料センター
クラーク神学館	竣工当時のクラーク神学館 玄関欄間に刻まれたクラーク神学館の正式名称 Byron Stone-Clarke Memorial Hall	1893年ごろ	同志社社史資料センター
同志社教育のバックボーンとなるキリスト教主義	キリスト教文化センター発行『基督教主義を 以って徳育の基本と為せり-同志社大学とキリスト 教主義-』所収	2018年	キリスト教文化センター
同志社の精神的な基底をなすキリスト教主義	キリスト教主義と教育理念の関係を表す相関図 (キリスト教文化センター発行『基督教主義を 以って徳育の基本と為せり-同志社大学とキリスト 教主義-』所収)	2017年	キリスト教文化センター
チャペル・アワー	京田辺校地 言館(KOTOBA-KAN)礼拝堂	2018年	キリスト教文化センター
展示テーマ「同志社とキリスト教」			
ラットランド演説	油彩画「ラットランド演説」 グレイス教会	1965年ごろ 2005年	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
開校当初の今出川キャンパス	今出川校地最初の専用校舎 第一寮と第二寮 薩摩藩邸跡碑	1870年代後半 2014年	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
三十番教室	三十番教室 榎村正直(京都府知事時代)	明治時代 1887年	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
同志社英学校第1期卒業生写真	同志社英学校第1期卒業生写真 初期の同志社英学校生徒	1879年 1877年	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
同志社礼拝堂	竣工当時の同志社礼拝堂 竣工当時の同志社礼拝堂内部	1880年代 1880年代	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
明治20年代の今出川キャンパス	明治中期の今出川キャンパス ハリス理化学校開校日の今出川キャンパス	1880年代 1890年	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
オープン・プログラム	京田辺校地 手話入門クラス 今出川校地 パイプオルガン講座受講生発表会	2016年 2017年	キリスト教文化センター キリスト教文化センター
Doshisha Spirit Tour	新島襄旧宅(群馬県・安中市) 熊本洋学校教師ジェーンズ邸(熊本市) 熊本バンド奉教之碑(熊本市花岡山)	2009年 2013年 2009年	キリスト教文化センター キリスト教文化センター キリスト教文化センター
Doshisha Spirit Week	同志社大学応援団による演舞 講演会 キャンパスめぐり隊	2016年 2016年 2016年	キリスト教文化センター キリスト教文化センター キリスト教文化センター



同志社京田辺会堂光館ラウンジ展示第9期展

「同志社大学のキリスト教—同志社に蒔かれた種—」

編集：同志社大学同志社社史資料センター

発行：同志社大学キリスト教文化センター

発行日：2019年3月18日

©Doshisha Archives Center and Center for Christian Culture